

黒島（および昭和硫黄島）調査 一次世代ニーズに対応した小島嶼振興事例一

長嶋俊介

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

Kuroshima Island and Showa Ioujima Island- the case of small island promotion targeting next generation needs

NAGASHIMA Shunsuke

Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University

要旨：黒島は3小島嶼一村でこの島にのみ2集落をなす。遠隔地島嶼だが歴史的に本土の政治的逃亡域地・遠島役割も、黒潮の南島文化も色濃い。トカラ列島からの行政分離は規模をさらに小さくし、島嶼不利益を増した。しかし3島はまとまりがつけやすい。若者の不利性克服の取り組みと、島人口の少ないことでの結束で取り組んでいる島内・集落内ネットワーク形成、芸能文化保存や老人向け給食活動等を取り上げた。

Abstract: Kuro-shima Island (literally translated as Black Island) is a remote island with deep historical traces of political exiles from the northern mainland and mixed with cultural influences from the southern islands. Kuroshima Island has tight connection with its neighboring islands Takeshima Island and Ioujima Island. Collectively, these islands are known as Mishimamura (the Village of Three Islands), in reference to the islands joining to form one village with two communities. Despite its remoteness and small size along with other disadvantages such as segregated governance from the Tokara Archipelago, its inhabitants have formed a strong community network within the island and within the village. This includes improving provisions for the young, delivering lunches to the elderly and cultural (especially performing arts which may be pacific origin) preservation and promotion activities.

1 はじめに

今回調査は気象条件で短時間の上陸調査に留まったが、役場出張所の協力も得て島内主要域を一巡できた。一巡は三度目だが初めての調査地もあった。また大里小中学校長他教諭各位にも協力を得た。期して感謝したい。今回も平家落人遺跡 [わずか2年間だが重要な意味があり二見城ともいわれた。五輪塔と大石と未発見の平山氏墓石がある] にたどり着けず、その遺跡痕跡調査ができなかった。また彼らの初期移住先の一つで今も人の居住のある中里も今回も素通りであった。次回を期したい。

調査とその整理にあたり村田熙「鹿児島県大島郡黒島」『離島生活の研究』国書刊行会1966年（1950-52年調査）、松永守道『三島村秘史』1972年三島村、三島村村誌編集委員会『三島村誌』1990年、牧島知子「黒島の盆行事」『鹿児島民具』22、pp.19-32、

2010年を参考にした。

2 若者を核にした地域振興の芽

(1) 小島嶼不利益の克服と同利益の発揚

島人口の少ないことは各種限界状況を生み出す半面、別の可能性を生み出すこともある。小島嶼はその意味で独自社会空間でもある。本土から遠隔にあるこの黒島はその典型事例の島である。239人（2005年国調）の島だか、各100人ほどの2つのシマ（最小集落単位）社会が島の東と西に5キロ程の山道の基幹道で分離している。高齢化率は32.2%（同）。いい意味で対抗しつつも、少ない人口で島を成り立たせる工夫もいろいろ見られる。三島村そのものも他の竹島83人：31.3%（同）硫黄島140人：25.7%（同）を合わせても合計462島にすぎず、また人口が減りすぎない対策と若者を組み入れた地域振興に懸命に取り組んでいる。そのエビデンスの整理がその目的の一つである。

(2) 若者の取り組みと島内・集落内ネットワーク

二つの集落の青年会は、それぞれ土曜日夕方オープンする（青年会役員担当）、飲み物以外は持ち込みのバーで懇親を重ねてきた。15年ほど前民宿の方に勧められて食後、合流したことがある。都会と違い、夜の楽しみ機会がないので、始めたと言っていた。片泊ふれあいセンターと大里健康広場の中の青年小屋にある。写真の様に清潔感のある、会計もきちんとしている素敵な集会所である。全国的にも珍しくかつ長く続いている活動である。そこに、青年会活動の総括や記録写真などが掲示してあった。両集落共、敬老遠足・釣り大会・プロ退治（達成感表明）・交流会（両集落間・硫黄島ジャンベ研修生）などに前向きに取り組んでいる様子が記録されている。

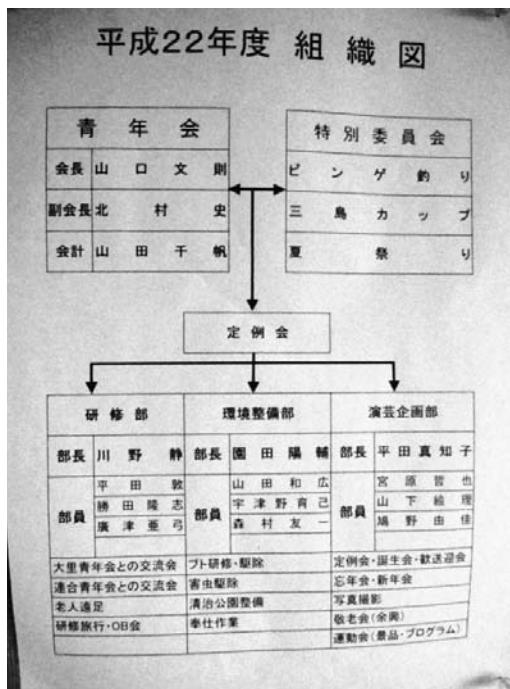




写真1-6. 片泊青年会のバーと活動内容揭示とバーベキュー道具・カラオケもある



写真7-8. 大里のログハウスバーあしたよなー内部と2009年の総括表

(3) 若手の老人サポート

片泊ふれあいセンターの調理施設で若手主婦たちが調理に取り組んでいた。週何度かの老人向けの配送サービスであった。自発的に始めて定着したという。NPOを設立するまでもなく、身近な関係の中で自在に組織的に活動するあり方も、新しい（公）共である。伝統的と思われる遠隔地村落の中に存在する「先進性」であった。



写真9. 片泊若手主婦による昼食配送システム

3 伝統社会的価値・文化財保存

(1) 文化財の宝庫黒島の存在理由

三島村・十島村は伝統文化・社会調査者にとり宝庫のようなところである。孤立小離島の列島・遠隔性・黒潮文化圏としての遠隔地との直接的結びつき・道の島々としての琉球・奄美や大和との関係が複雑に折り重なり、辺境性が古来文化を色濃く独自に保存しても来た。これに加えて、黒島は硫黄島のような産業展開や多くの人の出入りもなかった。

まず、いずれも平家落人伝説があり、東：大里は公達の集落で西：片泊は武士の集落とされ、片泊の2キロ東がけ下海岸には平家城（隠れ集落的）遺跡がある。また古くて固有な墓石群が残されている。このような特徴ある社会性の確認も今回の調査の目的である。

(2) 無形文化財の継承

個性ある盆踊りや面踊りは極めて有名である。若手が限られるのでその後継者難ゆえに、人少ないのでかえつていやいやながらも全員が動員される。この島で生きていく以上、ほとんど回避できない。とりわけ大里二月踊りは全員参加で、先生方も（もとめられ）参加する。以下使用する写真は、地元各施設に掲示されていたものである。



写真10-11. 大里に400年受け継がれている黒島面踊り・・・その担い手は若手である

(3) 学校も取り組む芸能伝承

大里小中学では、愛校ボライティア&エンジョイジャンベ（ジャンベはアフリカの太鼓だが硫黄島だけではなく竹島も含む村全体で取り組んでいる）などで、授業の中で伝統的な芸能に取り組んでいる。島で生きていくものにとってはいずれ避けて通れないものでもある。

「しおかぜ留学」生も実演する。島にもどった時には、いつでも仲間と参加可能になる。



写真12-17. 小中学での地元芸能伝承への取り組み

(4) 多様な文化財

遠隔・辺境の島であったために、廃仏毀釈を逃れて、鎌倉時代の墓などがきちんと残っている。神社や拝所には面や石が神体として配置され、素朴な信仰性が維持されている。また平家追討史跡もある。平家城（島北部）から日暮村（島南部）に逃れたものを討伐に行ってその娘と結婚した大庭氏の墓は今も毎年ここで掃除後盆踊りが奉納されている。また菅尾大明神社には疱瘡願い碑があった。当時伝染病は島人口を激減させたので、旅人は集落内に入れず、数日以上健康であることを確認して入れた。その結末も文化財や価値観保持に作用したと思われる。黒潮文化圏としての南方系仮面の伝承はとりわけ貴重である。

公家文化の伝承として「あしたよなー（さようなら）」の方言は、八丈島とまったく同じである。また正月の食事や飾りは、平家城に入った時が年末で、十分に準備できなかった記憶を今に伝えている。無形・有形文化財の宝庫であり、別の機会に詳しく触れたい。



写真18-19. 芸能の独自性例示と学校での面作り



写真20-22. 菅尾神社の疱瘡碑。ダゴ石を御神体とする横長の祠

4 新しい産業展開・観光資源創造

(1) 海と山の新しいイベント企画

エコツアー・トレッキングの道・島を周回するルート等は観光資源としての将来性を保証するものである。その現状と近年の取り組みを現地で確認することも、第三の目的である。自然・景観・歴史と文化財資源の解説力はリピーター増大や有償ツアーガイド付き観光という雇用と産業の可能性を生み出す。それらに関わる可能性確認も行った。

現地でトレッキングマップをいただいた。その標識も各地で確認した。写真23-24に見るように、山がちのこの島だが、スタート地点も高いので標高差は意外に高くない。2011年度には、トレッキング道を利用した競技会も始まるという。海のヨットレース三島カップは程良い遠隔島嶼の利点を活かした全国区イベントとして定着しているが、多様性・希少種植生も指摘され始めている黒島独自の企画になりそうである。



写真23-24. 黒島のトレッキングマップ [新しい需要の創出]

(2) シイタケ牧場の失敗と食育ツーリズム

村営しいたけ牧場は菌打ち込みツアー体験の場所として宣伝された。一時基幹産業扱いされ、注目されたが、観光的にはうまくいかず衰退した。季節が冬正月ということもあった。春の苦みのない高級サシミの琉球竹・大名竹のタケノコ、そして夏のバナナ（島バナナは付加価値化ついて近年高価で取引されている。種類によっては電子レンジでサシミ風食味にもできる）、また豊富で多様な水産物（釣りから調理までの参画）やイモ類も交えた土オープン料理（太平洋のウム料理＝ニュージーランドのハンギ料理）などでの独自の食育・グリーンツーリズムの可能性もある。失敗を活かした工夫と人材・協力者発掘（2011年からその抱負を抱いたNZ人が住む予定である）に期待したい。

自然エネルギーを複合的に組み合わせて調整するマイクログリッド施設も島内にできた。補助金による先駆事例であるが、環境島イメージにはプラスである。また写真27-30のような竹・木製フェンスは、旅人の耕作意欲も刺激することであろう。



写真25. 山中のシイタケ牧場跡地



写真26. 島エネルギーのマイクログリッド施設



写真27-30. 独自の土を囲う竹製・木製フェンス

5 昭和硫黄島

南星丸調査の利点は、定期航路ルート外からの観察にもある。今回は昭和硫黄島を間近に見せていただいた。過去記録に比べ低平になっている。さすがに新しさ、ごつごつ・地熱感すら伝わる。最良の釣り場でかつては新任教官歓迎の釣り大会も行われていた。安全性が確認される前提であるが、ここを硫黄島・黒島双方からの、行楽・訪問コースのオプションとして組み込めたら興味深い試みと見た。なお海底火山ポリウムは陸上硫黄山の3倍である。



写真31-34. 昭和硫黄島